

トルコ語の非人称受身の成立条件

東京大学人文社会系研究科言語学専攻修士 1 年

青山和輝

本稿は、トルコ語の非人称受身 (Impersonal Passive; 以下 IPass) の成立条件を考察し、先行研究より妥当な分析を行うことを目的とする。第 1 節では IPass の典型的性質について概観し、第 2, 3 節で従来提示されてきた分析を展開する。第 4 節ではその再解釈を目指す。第 5 節は結語である。

1. 非人称受身とその文の意味

トルコ語では自動詞に受動接辞-Il/n¹をつけて次のような文がつけられる。

- (1) *Haftason-lar-ı göl çevre-sin-de koş-ul-ur.*
 weekend-PL-POSS lake around-POSS-LOC jog-PASS-AOR
 「週末には湖のまわりで (多くの人が) ランニングする」² (Nakipoğlu 2001i (13a))

このような文は、動詞が動作主を示す主格名詞句をとることができないため非人称受身と呼ばれる。例文(1)では、もともと 1 項動詞である「走る koş-」に受動接辞が付き、ひとつも名詞句をとれない koşul- という形がつけられている。

非人称受身は一般に、属性や習慣を表す中立形-Vr/mAz³とともに用いられ、他の文要素の属性を表すために用いられる。この場合、表層に出てこない動作主は必ず不特定なものと解釈される。すなわち、例文(1)では不特定多数の人間がランニングを行うことが含意されており、それによって湖の属性が表されている。例文(2)は対応する能動文(2a)と非人称受動文(2b)を並置したものであるが、(2b)は不特定の人間が毎晩泳いでいるという事実に言及することで、たとえば、島が泳ぐのに適したスポットであるというような、島の属性を表す文になっている。

- (2) a. *Turist-ler ada-da her akşam yüz-er.*
 tourist-PL island-LOC every.evening swim-AOR.3
 「観光客は島で毎晩泳ぐ」

¹ トルコ語は母音調和のある言語である。

I は 4 種の狭母音 i/u/ü/ı [u] の円唇・前後同化、

A は 2 種の広母音 a/e の前後同化を示す。また、

D は t/d の子音同化、-(y)や-(İ)は貫入音を示す。

また受動接辞は、動詞語幹が

子音 (l 以外) 終わりならば-Il (すなわち il/ul/ül/il)、

子音 l 終わりならば-In、

母音終わりならば-n という異形態をとる。

² 本稿で引用した例文について。グロスの逐語訳は基本的に原典準拠としたが、対訳には直訳風で分かりにくいものが多かったため、読解の便宜上、発表者が日本語に訳したものを添えた。

³ 中立形は動詞により {-r, -Ar, -Ir} の異形態のいずれかをとり、否定形は交替形-mAz となる。

- b. *Ada-da her akşam yüz-ül-ür.*
 island-LOC every.evening swim-PASS-AOR
 「島では、毎晩（多くの人が）泳ぐ／泳ぐ人がいる」 (Kornfilt 1997: (1146))

トルコ語では、文の意味上の主語が不特定になるこのような場合、義務的に受動化が起きている。例文(3b)のように受動化せず単に主語を表示しないだけでは、特定の三人称主語が省略されているのだと解釈されてしまう。「ここでは誰もタバコを吸わない」という不特定動作主の読みをしてもらうためには、きちんと受動化しないといけない。

- (3) a. *Burada sigara iç-mez.*
 here cigarette smoke-AOR.Neg.3
 「ここで彼／彼女はタバコを吸わない」
 b. *Burada sigara iç-ül-mez.*
 Here cigarette smoke-PASS-AOR.Neg.3
 「ここでは誰もタバコを吸わない（→禁煙）」⁴

なおトルコ語のIPassは、いかなる場合もby-phrase等の手段を用いて動作主を表現することはできない。

トルコ語のIPassの意味を考える上で重要な特徴は、人間以外の動作主でその文を解釈することができないという点である。たとえば例文(4)は、単に「吠え声が聞こえる」と訳すと野良犬か何か吠えていてもよさそうな印象を受けるが、実際には人間が（つまり、多少たがの外れた人間が）吠えているという解釈しか許されない。

- (4) *Gece sokak-ta havlan-ül-iyor.*
 night street-LOC howl-PASS-PRES
 「夜、道で誰かが吠えている／吠え声が聞こえる」 (Biktimir 1986: (9))

疑問文では次のような例が見つかる。例文(5)はいずれもインターネットからの例文である。この場合、かなり「可能」と近接した意味になっているのが興味深い。

- (5) a. *İlk buluşma-da nasıl öpüş-ül-ür?*
 first date-LOC how kiss-PASS-AOR
 「最初のデートでどうしたらキスできる？」
 b. *Dakika-da bir sayfa nasıl oku-n-ur?*
 minute-LOC one page how read-PASS-AOR
 「毎分1ページ読むにはどうすれば？」

⁴ 非人称受身は特に貼り紙などでよく用いられ、許可や禁止を表す。中立形には様々な用法があるが、命令や禁止といった言語行為的な用法もそのひとつである。4節で後述する。

2. 非能格動詞と非対格動詞

IPassは通言語的に、非能格動詞では可能であるのに非対格動詞では不可能である、というふるまいを見せることが多い(cf. Perlmutter(1978))。ところがトルコ語では、非対格動詞でもやはりIPassをつくることができる(Biktimir 1986: 58)。この点がトルコ語のIPass研究において常に俎上に上げられてきた。

非能格動詞・非対格動詞とはPerlmutter(1978)の「非対格仮説」に始まる自動詞の二分法である。自動詞は実際には統語的に均質な動詞群ではなく、ふるまいを異にする様々な動詞から構成されている。主語名詞句の指示対象が担う意味役割という観点から見ると、典型的には、非能格動詞は動作主を項にとる自動詞であり、非対格動詞は被動者や経験者を項にとる自動詞である。例(6, 7)の他動詞文との比較により、非対格動詞「食事する」の主語が他動詞文の主語と同じ意味役割を担い、非対格動詞「壊れる」の主語が他動詞文の目的語と同じ意味役割を担っていることが分かる。

- | | | | | | |
|-----|----|---------------------|-----|----|---------------------|
| (6) | a. | <u>太郎が</u> 朝飯を 食べた。 | (7) | a. | 太郎が <u>花瓶を</u> 壊した。 |
| | b. | <u>太郎が</u> 食事した。 | | b. | <u>花瓶が</u> 壊れた。 |
| | | 動作主 被動者 | | | 動作主 被動者 |

この意味役割の違いが統語構造にそのまま反映されているというのがUTAH (The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis) の主張するところである。非能格動詞の主語名詞句は最初から他動詞の主語名詞句と同じ位置に生起するが、非対格動詞の主語名詞句は他動詞の目的語名詞句の位置に生起し、その後然るべきタイミングで主語位置に移動する。非対格動詞の主語が統語環境によって他の動詞の主語とは異なるふるまいを見せるのは、そのためだと説明される。

- (8) The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH) (Baker 1988):
Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D structure.

他動詞文の受動化は、他動詞文の主語を消去し、目的語を主語に移動させることで行われるが、上述の構造上の平行性を考慮すると、非人称受身によって主語を消去し、例(1)のような文をつくることのできるのは、主語がちょうど他動詞文の主語と同じ構造にある非能格動詞のみである⁵。

下記例文(9)で用いる「ころぶdüş-」「溺れるboğul-」「成長するbüyü-」は、いずれも項として経験者をとり、その点で非対格動詞と考えられる自動詞であるが、トルコ語として非常に自然なIPassをつくることのできる。

- (8) a. *Buz-un üst-ün-de sık sık düş-ül-ür.*
ice-GEN top-P.3-LOC often fall-PASS-AOR
「氷の上はよく滑る」

⁵ では具体的にどのような制約を立てれば非対格動詞がIPassになるのを防げるか、というのは、受動化をどのような操作と定義するかによって異なる。たとえばPerlmutterは関係文法の範疇で受動化を「目的語の主語への昇格」と定義したが、この立場であれば「目的語の昇格は一度しか許されない」という制約をつくれれば非対格動詞の受動化を防げることになる(1-Advancement Exclusiveness Law)。

- b. *Yazın burada boğul-un-ur.*
 in.summer here drown-PASS-AOR
 「ここでは夏に人が溺れる」
- c. *Bu yetimhane-de çabuk büyü-n-ür.*
 this orphanage-LOC quickly grow.up-PASS-AOR
 「この孤児院では成長が早い／子供が早く成長する」 (Biktimir 1986: 59)

これに加え指摘されているのは、IPassのとり時制形との相関である。トルコ語では、非能格動詞のIPassは様々な時制形⁶を伴って現れるのに対し、Kornfilt(1997)⁷は、非対格動詞のIPassは中立形でしか現れないと述べている。つまりトルコ語においては、非能格、非対格といった動詞側の要因だけでなく、時制形の区別もIPassの成否に影響を与えているということになる。

3. 非対格・非能格の区別を発展させる

Nakipoğlu(2001)は、過去形でIPassを構成できるかどうか、また意味上の主語がどう解釈されるか、という基準によってトルコ語の自動詞を5段階に分類した研究である。

中立形のIPassでは、これまでに述べてきたように、不特定な人間が意味上の主語として前提されることになる。ところが過去形のIPassでは、動作主は不特定ではなく特定(specific)の人間、それも話し手を含む複数の人間動作主としか解釈できないという(Nakipoğlu 2001: 137)。すなわち一人称複数として解釈される。例文(9)は同じ文意のパラフレーズとなっている⁸。

- (9) a. *Diün iki saat koş-ul-du.* Lit. “Yesterday it was jogged for two hours.”
 yesterday two hour jog-PASS-PAST
- b. *Diün iki saat koş-tu-k.* Lit. “Yesterday we jogged for two hours.”
 yesterday two hours jog-PAST.1PL
 「昨日、私たちは2時間走った」 (Nakipoğlu 2001: (16))

Nakipoğlu(2001)では自動詞が1類から5類まで分けられている。表1において、○は当該組合せでIPassが可能であることを、×は不可能であることを示す。1/2類は中立形でも過去形でもIPassが可能な動詞群、3/4類⁹は中立形でのみIPassが可能で過去形では不可能な動詞群、5類はそもそも人間を主語にとることがなく、意味的な制約からIPassをつくれない動詞群である。

⁶ ここでは現在形-(I)yor、過去形-DI、完了形-mİş、未来形-(y)AcAk、中立形-Vr/-mAzを想定している。

⁷ これは B. Comrie & N. Smith(1977)の The Lingua Descriptive Studies Questionnaire に拠って書かれた記述文法書であり、特に非文になる例が載せられているわけではない。

⁸ 過去形のIPassがどのような場面で用いられるのか、発表者にはその全貌が未だつかめていないが、たとえば紀行文で「私たちは昨日アンカラを発って、途中ロカントで昼食にしました」などと報告する場合に全文(9a)のように受身形にすることがある。また梅田遼氏に、フィンランド語では受身形を一人称複数の動作に言及する際によく用いるということを教えて頂いた。受身の用法がどのように発展したのか興味が尽きない。

⁹ 3類動詞と4類動詞の区別はここでは問題にしない。

IPassとの組合せ	中立形	過去形	
1/2類動詞	○	○	非能格
3/4類動詞	○	×	非対格
5類動詞	(×)	(×)	

表1. 自動詞分類と時制によるIPass可否

図1に各分類に属する動詞が挙げられているが、Nakipoğlu(2001)ではこの違いが「誘因性」というパラメタによって整理されている。これは自動詞が表す出来事が内因性(Internally Instigated)の出来事なのか、それとも外因性(externally instigated)の出来事なのか、という基準であり、実質的に非能格・非対格の区別を細分化したものになっている。

1類動詞は動作主を主語にとり意志的動作を表す。2類動詞は生理現象など、意志性と関連があるが、むしろ主体の内的要因により事態が引き起こされ、それを主体が経験するような状況を表している。これらは出来事の誘因が動作主体の内側にある内因性の動作である。

3/4類動詞は非対格動詞と分類される動詞群であるが、中立形のみIPassを許容し、過去形のIPassは許容されない。5類動詞はそもそも人間を主語にとることがなくIPassは不可能である。これらは出来事の誘因が主体の外部に存在する外因性の出来事である。

←内因性				外因性→					
1	2	3	4	5					
atla-	ağla-	öl-	büyü-	bat-	跳ぶ	泣く	死ぬ	育つ	沈む
çalış-	gül-	boğul-	yaşlan-	çürü-	働く	笑う	おぼれる	年をとる	くさる
düşün-	hapşır-	bayıl-	buna-	don-	考える	くしゃみ	失神する	老いる	凍る
koş-	hıçkır-	doğ-		eri-	走る	しゃっくり	生まれる		溶ける
konuş-	horla-			karar-	話す	いびき			暗くなる
oyna-	kızır-			kırıl-	遊ぶ	赤面する			壊れる
yürü-	öksür-			patla-	歩く	咳をする			爆発する
yüz-	uyu			sol-	泳ぐ	寝る			しおれる
非能格									非対格

図 1. Nakipoğlu (2001: 144) による自動詞分類

以下に3類動詞(10)と4類動詞(11)の例を挙げる。Nakipoğluは、3/4類が表す出来事は「意志的に引き起こしたり、経験してそれについて報告したりすることができない」ために、一人称複数意味上の主語とする過去形のIPassにできないのだとしている(Nakipoğlu 2001: 142)。

- (10) a. *Bu göl-de yazın sık sık boğul-un-ur.*
 this lake-LOC summer-GEN frequently drown-PASS-AOR
 「この湖では夏によく人が溺れる」

- b. * *Bu göl-de geçen yaz boğul-un-du.*
 this lake-LOC last summer drown-PASS-PAST (Nakipoğlu 2001: (21b, c))
- (11) a. *13-17 yaş-lar-ı arasında çok büyü-n-ür.*
 age-PL-P.3 between a.lot grow-PASS-AOR
 「13歳から17歳の間に (人は) よく育つ」
- b. * *Bu ev-de büyü-n-dü.*
 this house-LOC grow-PASS-PAST (Nakipoğlu 2001: (24a, b))

Nakipoğlu(2001)は、過去形IPassの意味上の主語が「話し手を含む複数の人間」だと解釈される点を重視し、3/4類動詞の過去形IPassが許容されない理由を分析している。しかし過去形においては、Perlmutterの指摘したように非能格動詞のみがIPassを形成し、非対格動詞はIPassを形成することができないという点を軸に考えると、むしろトルコ語のIPassに見られる非対称は、中立形の性質に帰着すると考えることができるのではないか。

4. 中立形の用法

中立形には様々な用法があるが、次のように大別される(分類はTüreli (1960: 34)を参考に発表者が行った)。

- (a) 普遍的真理や諺などを表す、または、属性叙述を行う用法
- (b) 命令、意志、推量などのモダリティ用法
- (c) 過去時制の代わりに用いる用法 (=歴史的現在)

益岡らの叙述類型によると、叙述は属性叙述と事象叙述とに大別される。属性叙述は時間安定性の高い恒常的な属性をあらわす叙述タイプであり、時間安定性が低く特定の時間に結びついた出来事や状態をあらわす事象叙述と区別される(cf. 益岡(2008), 影山(2008))。中立形が「特定の時間に縛られない」叙述を行うことは、従来から意識されてきた(cf. 林(2013: 137))。(12)に用法(a)の例文を挙げる。

- (12) a. *Dünya güneş-in etrafında dön-er.*
 earth sun-GEN around round-AOR
 「地球は太陽の回りをまわる」
- b. *Su uyu-r, düşman uyu-maz.*
 water sleep-AOR enemy sleep-AOR.Neg
 「水は眠り、敵は眠らない (油断大敵)」 (Türeli 1960: 34)

中立形が事象叙述ではなく属性叙述であるというのは、習慣を表す表現の対照から理解することができる。トルコ語では中立形のほかに現在形を用いて習慣を表現することができるが、このとき、中立形がある習慣を対象の永続的な性質として叙述する形式であるのに対し、現在形は単に観察した事実を述べているだけである(Göksel and Kerslake 2005: 339)。そのことは、ある習慣が短期間で変化することを示唆するような、特定の時間を示す副詞句と共に起できないことにも見て取れる(14)。

- (13) a. *Ali sigara iç-mez.*
 Ali cigarette drink-AOR.Neg
 b. *Ali sigara iç-m-iyor.*
 Ali cigarette drink-Neg-PRES
 「アリはタバコを吸わない」 (Göksel and Kerslake 2005: 340 (67)(68))
- (14) a. * *Ali bu günlerde sigara iç-mez.*
 Ali these.days cigarette drink-AOR.Neg
 b. *Ali bu günlerde sigara iç-m-iyor.* (Göksel and Kerslake 2005: 341 (69))
 Ali these.days cigarette drink-Neg-PRES
 「アリはこのごろタバコを吸わない」

属性叙述に関しては、文が属性叙述になっている場合のみ、本来は許されないはずの異常な構造が許されるという例が様々な言語で報告されている(影山2009)。たとえば英語で受身をつくる際、(15)のように付加項内から名詞句を抜き出して主語に据えることはできないはずであるが、述部が主語の何らかの特徴付けになっている場合にはこのような異常な構造が許容される。

- (15) a. This spoon has been eaten with. (Davison 1980)
 b. That city has been fought many a battle over. (Bolinger 1975)

これを影山(2009: 10-11)は「英語の異常受身文が一般的な構造制約に違反しているにも拘わらず適格と認められるのは、出来事そのものの展開を描くのではなく、出来事を踏まえて主語の属性を表現するという機能を持つためである」と述べているが、トルコ語のIPassもその一例として捉えることができる。例文(8)などは、それが属性叙述になっているから例外的に許容されているのであって、本来であれば構造的に許容されないのではないだろうか。

5. 結語

本発表ではトルコ語のIPassの先行研究Nakipoğlu(2001)を取り上げ、そのデータと分析を検討することで、より妥当性の高い分析を提示することを目指した。トルコ語のIPassは、過去形では非能格動詞のみ許容され、非対格動詞では許容されないという、通言語的に見られる性質を満たしていること、またトルコ語の中立形が、さまざまな言語で特殊な構造を許すと指摘されている属性叙述の用法を持っていることを根拠に、IPassのデータを再解釈した。

叙述タイプとIPassとの連関を明らかにするために、今後は従来のような動詞単体に着目した研究ではなく述部にまで視野を広げて詳しく調査していきたい。また、中立形と過去形のみに着目するのではなく、現在形や未来形など、他の時制形にも着目しなければならない。実際、現在形の例文(4)は非能格動詞であるからIPassになるのは当然だが、意味上の主語が一人称複数に限られているわけではないから、過去形ともふるまいが異なる。また、特に関係節において未来形のIPassが頻繁に見られるが、関係節に埋め込まれた場合も、本稿で論じたような特徴は保たれているのか、調査が進んでいない。

- (16) *Bugün tam da hasta ol-un-acak bir gün.*
 today very sick become-PASS-FUT a day
 「今日はとてもよくない日だ (天気や都合が)」

なお本稿のトルコ語例文は、出典を明記していないものは筆者による作例であるが、出典の有無にかかわらず全て30歳台イズミル出身のトルコ人インフォーマントによるネイティブ・チェックを経ている。

縮号一覧

AOR	aorist	中立形	Neg	negation	否定	PL	plural	複数
FUT	future	未来形	P	possessive	所有	PRES	present	現在
GEN	genitive	属格	PASS	passive	受身			
LOC	locative	位置格	PAST	past	過去形			

参考文献

- 影山 太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』くろしお出版: 21–43.
- 影山 太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, 1–34.
- 林 徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社
- 益岡 隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』くろしお出版: 3–18.
- Baker, M. (1988) *Incorporation: A theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press, Chicago, Ill.
- Biktimir, T. (1986) ‘Impersonal Passives and the -ArAk Construction in Turkish’, in Slovin, D. I., Zimmer, K. (eds.) *Typological Studies in Language* 8, 53–75.
- Bolinger, D. (1975) ‘On the passive in English’. in: Adam Makkai and Valerie Becker Makkai (eds.) *The First LACUS Forum*, 57–77. Columbia, S.C.: Hornbeam.
- Davison, A. (1980) ‘Peculiar passives’, *Language* 56: 42–66.
- Göksel, A., & Kerslake, C. (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London/ New York: Routledge.
- Kornfilt, J. (1997) *Turkish*, London: Routledge.
- Nakipoğlu, M. (2001) ‘The referential properties of the implicit arguments of impersonal passive constructions’, in Elgüvanlı-Taylan, E. (ed.) *The Verb in Turkish*, John Benjamins, 129–150.
- Perlmutter, D. (1978). ‘Impersonal passives and the unaccusative hypothesis’, in *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 157–189.
- Türel, O. (1968) *Türkçe Gramer ve Konuşma*. ムラマツ印刷所 (印刷).